羣書類從

百五十四下

和書門
類 九五九五
號
函 二〇四
架 四
冊 六七〇

内閣文庫
類 和書
號 九五九五
冊 六七〇
函 二四
架 一五

内閣文庫
番號 和 9595
冊數 670(206)
函號 214 39

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從卷第百四十四下　檢校保己一集

和歌部九

續門葉和謌集卷第七

慈尊

一橋家藏書

宮内省圖書寮

蓮花院右大臣

おもひ入る心のうちをあらはすは神ぞ知

念西法師

おもひ入る心のうちをあらはすは神ぞ知

前権僧正 教範

無意乃古ゝ詠を
ゝ
ゝなるゝ我ゝ
ゝ

前大僧正 聖忠

かくれゝ
ゝ

前大僧正 静厳

九條前関白の家ゝ

前大納言 実教卿

無量寿院松若丸

神に奉幣をゝ
ゝ

権律師義俊

神をゝ
ゝ

君被知意ゝ
ゝ

法印定任

ゝ
ゝ

人のゝ
ゝ

法眼宗田

ゝ
ゝ

法眼覚培

志のひとりゐ山のかちとさるものハ神をたてまつる滅の名残

観心院有教法印

滅こそ我心のさとりていくぬよ神のこゝろとなんをもう

寛尊法師

宗通懇乃心を

伊勢の海やえるめ鳥さるしいるかつむるみるかふ心をハ

蓮花院右王丸

恋しこゝろ

心よはたのぬものをいまいとてむすぶとおもハこゝろの紫

法印賢助

志ゝをてもひかるを深さまをハそいまよ後いのこゝろのくむ

参議恋といへ抜きの歌

清浄光院鶴寿丸

とくまをハなる我いにをんやさうへのいとをる恋と神よみをも

待恋の心とよそる

寂静院孫鶴丸

面てとひをのかをとハむなくてちきくぬ月を神恋と

人のこゝろくゝ待うくゝ待のけ

釋迦院孫鶴丸

いくよ海さむあき庭の月数をおのゝ滅の神よみをん

夕待恋の心を

權律師兼勝

かさりはてくる夕ハいはる山猫の月なよ八くるきめと

大智院幸乙丸

をのめはたかぬいつくのしてるくしひてもまくさのしたまでタをそまつ

寶池院鶴松丸

くの形やまくらのたもとにすまくるこゝろ夕れのそら

妙法院尊若丸

たの給をいつくのそとハ法るものくせめてもふれ給とまるか

權少僧都定覺

きみやくるとまつ中くらきにぬのめ言とわまとやとまし

念西法師

さのとと人まつ時ハ秋のよハ水よのとゝたのそのあの

法印相助

人をまぬ神の淚よくるかたまつよはまなれ月給の月

紫宸殿とゝ新とくるる

法印定曉

まちわぶぬさしたの笠ものの紫ものいのにるまくの小紫ぬ

宮僧正道性

松人所くたのめぬこにもまくるにさくるひとゝ到ハ

教忠院嘉寶丸

をしたくをとめて心を淚をくやむなり或よくちの敷ハ

河間梨賴胤

さるとゝ恋たのむそのハ年とめはくくや恋の合くん

已灌頂一海

[illegible]

河泉院鶴壽丸

[illegible]

法眼[illegible]弁

法印公紹

権少僧都教圓

[illegible]

観心院仲宝丸

法印長順

権大僧正　静尋

権少僧都[illegible]

念西法師

こゑたかくみなみにのけさとなへまけてきたりすゝ月やすらん

寛尊法師

いさてけさかへらんとのうはかにそくの侍のなくへさらさをハ

権律師義俊

かけやとる袖のなみたに袖をしてかくくまく月まさるもおもへは

読人不知

わすれつゝまつあしたの侍八月にそひなからおもひてたえしま

阿闍梨實憲

ゆつきゆくみましひかまさとたゝちさしてまちさらむの哉

釈迦院安喜麿

まつよひはあしくうらみも文にひて別ではは晨明の歌

永仁元年長尾宮哥合に絶恋のこゝろを

権大僧都覚継

うかりけるちきりよなとも秋のみそはなかのかなの袖ぬれてもん

題しらす

妙法院瀧墨丸

うつろふ秋の色こそ深きそ袖まくらて

三寶院千々丸

おもゐのゆくすゑをぬなかへひとハおもひわのおしちきる

題しらす

権律師頼憲

はるゝ人よりきるとこそうのぬをとまれてハやもとゝのゝ
　　理性院法橋
なりひさやあひ今よりのうまのすゝかるゝみよかを能
　　前大僧正聖尊
侍のゝ月にそひこしハをのはるゝ人をやもとゝ
　　寶池院尊玄
やもとゝのぬ人よりまてとちきりしハあひみるほとのかゝ
　　地蔵院尊九
　絶不値恋の心を　　あり梁
ありひさやあ[illegible]をとゝえぬるあるゝ川の流るゝのとあるゝ
　　無量寿院松若丸
　遇不逢恋

ひさの枝とゝひてやうまてはしをなといはるゝ世
　　權律師圓信
おもひ世にはるゝとゝ成ぬなのむしやまよハかゝる人ゝ心を
　　尊延法師
爰なゝてよゝとゝあふ色をよ月あひあハ来ぬ袖ハ思ひ
　　法印覚雅
なゝひさハ人のゝ月をとゝくるゝのもうきあゝまにぬゝ神ハ
　　法印憲清
あひ思ひを世ゝのゝ月ハ秋のむゝのゝ月をみてはまをなをのゝる侍
　　密池院松若丸

おもひこそ日とともに行末のさかりなれども老の身に
影しぬ　法印親瑜
吹風のうつりかはるにつけてもなほ春の空の名残
かくばかりのおもひたえぬあるべきかはいかなる人の老の
身にさそはれて　権律師慈海
絶後遇恵とのべ新古法を
拾のあはれさ山の井のあさくはまるあさをに袖ぬれ
ぬる　地蔵院尊弘
なほ案

遍照院愛二
恋の心を中に
かくばかりたのみをかけしかひもなほ恨なれたる
三室院千尋
あはれ世の恨名をまことにてもいのちあるものとも
影しぬ　法印定教
をはつるかりのとまりとあるかぎりなれたるもえんに恨
無量寿院宝光
おのづからいまはさもあんあさゆふのよりひるにこそ
恨恋の心
前大僧正覚瑜
あかつきのみねのしらくもいまはとのこのくもらぬ

権大僧都公性

ら〻世へさくらの紫さへ捨かぬのみきる衣をおもはなつかさ

報恩院の永寿丸のにすみて包さしくれとつ遣

さかしらは法なき侍し　報恩院吹若丸

ちかはしをまちたるのこゝはむかしのまつそしみくるをみに掛ける

返しのうたの中に　同院永寿丸

身をうらむ道八かくものゝふへさしをまたゆかしくおもへとも捨

題しらす　権律師賢快

すくにもひとつは法の道ふさきに恨ても人のこゝろをもみえ

観心院有夜叉丸

法の道ふみそめしよりいろにとまりなきをもとたのむ身のうへ八

疑念の詞　法印定任

身をしる道八法のことくにおりける紫の花もいはかもとうらくらき道て

権少僧都経覚

むかしこにさくらめぬ人のことのはくれたくねまさもうらむ道なり

題しらす　権少僧都経案

かたことぬ身をかきはしかたさきに道六人のはなも人のこゝろは

慈心とてよみける　法印道恵

なその紫は人のおさけ法にはなもみかきにむなかしよなり道

人くあまた慈の心よみける中に

法華経をかきたてまつりて法花堂に
人をうゑおきて侍りしを新宮にまゐらせ侍りしに
法華経をかきたてまつりて法花堂に
百首の歌を奉に恨恋の心を

釋迦院宝喜丸

報恩院校王丸

蓮花院土用夜叉丸

いにしへ人うき我うとおもひしをけふはまた人よりの
歌一首

釋迦院安寿丸

なのりとにうゑみなさはしかれぬ身をまとて人の法華経

人をもうゑかれぬるかとてうゑおきて侍りしを
恋の歌中に

法花長吹

権少僧都道順

まとしのこあひみまほしのハやもとんとおもふこゝろ
あひたりをまた人をもさしくをとつまとの
さうけまとハやはのくしをまた

蓮花院松葉丸

我もとやもとそとぬといひやんうのてまとふ心あのやと
被忘恋の方へ詠

権少僧都誉

そのこゝろとやまとこゝろのむうひもあり侍りすまとまとは侍りあの法華

名根不忘恩といふ事を新仏成　後鳳法師

いつ世まで八つうきめみるうき人乃ちぎり侍ぬ世まさるう

片思の仏をよせる　法印親瑜

もろともに思ふとまた小さひともおもふ人のこゝろ和

寶樹恩といふ事を　権律師頼誉

もろともにたのもしとおもふ人のまことをなの外

影供　権律師慈勝

ちはやぶる八十まをかさとなるかのまさるのぬる

前大僧正聖尊

はしとも思ひなをすきめ新月日ぬ月をるはの仏よそさて

法印宗任

つまなのこゝろをこゝろるそうのけ思ふこゝろ松をひ世

隆覚法師

せめてなを我人のこゝ誘ふなうとやまさ人をそ八うこゝ

悔恩乃仏を　権律師円俊

くゆさはさ我つよかをそ新おけく仏人を松をくぬ世仏ゝ

影供　権少僧都経覚

中ゝ身ぬ世人ゝこゝん新て後のよ八ちきのある身とるのも

依恩道世といふ事を新事を

合寂上人

法印定教

たゝ世にをはしまして仏の法をたもつはかりなるこの法のやれもそん

前権僧正 教範

もゝ仏教をたもつるはかりをはしまさはよかるへきなり

別意を

法印弘紹

あしたをもいのちをはしまさはやとおもふもこの世をすてゝ

法印實勝

法のためにはたゝ月よりさきをもはかるへからす横雲の

法印定任

暫はこの世のつゝみをふかくとなをもんはかりをもてあそみたもいはまはかるよりきよりまを中老を新人をあるように

仏なをすうしく形の仏ををもはかりをもはかるへ

大智院月光丸

かく計れをふかにあるにあらすをとはいはのみ仏をもん

中をしけ人をしけ人はかりをはかる

遍智院瀧一丸

あふこのたゝ八ものにをいひををしく命よりはかりをもん人をもるに

意分の中に

蓮乗院右王丸

わするもうき形ちてあ成おさけあてこゝひの美を人よ
秋意を以新成　　河間梨明渕
うゝるこゝ唯れかうこの家おもて滋はくまぬ秋の色れ
　　家月意　　伊著梨宣舞
いにしへんかゝにやとる神のうゝ月さゝうゝ風はゝくゝ
意分あまくゝゝて人のもゝはつゝ伯ゝ
　　中に　　報恩院永青丸
つゝるかよ人をいまハはゝくゝゝもゝはゝちみ山路の月
紅葉の枝を滋ゝくゝくゝもゝる月かよの色ぬ神のうゝ人ゝ形
　　權少僧都頼仲

きゝもと人をのめする月新のゝくゝまてを成やまゝ
　　運慈院禪師丸
おもひさやとゝて待ゝ月ゝけれゝもゝゝみよかんゝの八
　　權少僧都勝玄
やとゝ八をくゝゝる滋はせめてゝ月よゝゝまぬ滋ゝ形
安藝國ゝ山寺ゝのゝゝゝてれゝひをゝを
伯ゝゝ八すみを形和のゝよかゝ河ゝ
　　道覺法師
初あゝかくゝぬをゝ月ゝ八まゝゝんまをれゝゝこゝは春

月前恋

妙法院尊乗

たのみそのあまのもしほやまさぬらん　いまハかりそめ
月のかたぶくをうらむ人の海のをかをそこそ侍ん

得業後鼎

たゆたふもいろは人をそ秋をうし月ハかりぬる今宵のをハ

法印相鼎

寄煙恋

法印静運

たとふ社のやしろにかをりつゝ思ふ人のをもかゆ

義濤法師

越の海のいりをの浦に吹風のやむときもなく恋わたるかな

寄霧恋

権少僧都運雅

霧のをもにくらふ人ちをくはかやうの形なる人をさ
ちをの人けるやうをはぬをさたるる水干はそて
はつ西をはさみふとりて水干をハかゝ
をしをあかをよそをく人をなる

権律師定叡

とくをををくをかにをハあくさをてをををはかすやいをくまさ

寄門恋

法印静運

たのくををはをさつ山川をのしをとはぬうをみハをる人をなし

宝池院七命丸

[illegible]

權律師宣遍

弘安九年[illegible]

波[illegible]

[illegible]

[illegible]

報恩院松王丸

あ[illegible]海のあみとさえたのまもひかるぬ浦もなけれハ

和歌 [illegible]

[illegible]海波の[illegible]

[illegible]

[illegible]風の使をそよつ[illegible]海の波ふんを[illegible]

[illegible]

法布定任

[illegible]

建長四年の[illegible]

仁和寺[illegible]

いろ〳〵まよ人〳〵の姿ハこゝかしこたゞ殺よつゆをそゝぐ新

西

たのまれよいろ〳〵紀念ハ校ようつゝ家ハおさけ身は

報恩院吉祥丸

橘舎ハ家しハそゝ人乃色とゝのかゝ〳〵ハるに

そゝて〳〵ゝ紙遠の侍とゝ成西洲のそゝとゝあ

宝池院勝王丸

楚人侍のあ新

かすゝぬ身にハ哭しやまゝゝ哭いろなゝゝ家成ゝ

春の紫意

釋迦院安長丸

ゝゝ〳〵なゝまゝ〳〵ハ紫ゝゝにゝのゝ〳〵てゝのおゝふゝハ

春の意

同性法師

ワのれゝゝし人のゝゝゝゝ新ゝゝなゝのふゝゝゝ遠ゝ塔ゝゝなゝゝ心

七月の法運菊院の徒舞丸をみて同者の実

禅門閑梨うゝゝゝ侍のゝゝ〳〵ゝ新

初秋のゝゝにゝ人ゝし菊ゝ舞ゝゝ神ゝ家ゝゝゝゝ

第大僧正道言すゝ矢侍のゝゝる日吉七百首の

法印長順

今に

いにしへれゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

春の意

河間梨頼胤

うき世をバそむきはてにし猶かはらぬ道にも人のくるよなされハ

聞性法師

ちとに出て行しをハいそうし侍すゝきて招く道ぞ秋風の山

権少僧都定誉

うらみても思ひなき世のかはらぬ葉をおほくすのかけの秋風

寄鳥恋

権少僧都道順

いまハたゞあねよの声すとこゑもおしむはかなき鴫の羽がき

寄蝶恋

三宝院千代丸

ねをふかくまつにこゑ上なくてつもるをハうすにもおもふらんよ

蓮花院禅師丸

いはまもる人のこゝろは秋風よすゞしくつもとはむかしをハなかく急

寄獣恋

義淳法師

奥山はいかにみつのかけぬるあをはすハすの荻はにかくさまえて

寄貝恋

阿闍梨房海

うしなきとあふにあまたはいつもむかひとのれむまをもくもをもふまへなん

弘成法師

おもふらむとよ夢来るいはなのおもしろきいひとはたゞとゞはかなしも有

うしろ同前し侍るに僧よねもひの所まねらず迄

てあつはよすみきるうたよりにつきてや送る

侍るに

大智院月光丸

あしいはらはいたの波をうつやのひろけをまくあをな
橘會はひきるやつくたに三井寺あの老僧清瀑
のやをろはしろ光量光院の池面あをあ
さりあるのちはをなくさ海うくあとさえて浅信ア
僧人〻次
そをるまあ
いまはよるをみそやをみあんこをなきは神のもしろにはうち姿を
入〻
三寶院義氏卍
をろもにちるひをそ紙をすハ神のうちに会ハなくも
前大僧正聖恵
あしをとをんてをもるはをのあるうをハ義もうつにれををを
ちう

あふをとをもる松ふをををてはをにをるゆをのうをを
法印道恵
ををもはをのみををに神をはくをを義はををわをに
法眼顕恵
はををみをはゆをををふをををき人のをを海の外はをををけあをはる
法印隆勝
あひみんをなのをす傳ハむるくて義をを人のまををあの義
阿闍梨明胤
はををみる社のあれをひ神のをあををハををの義をを義ををふる

寄衣恋　　権大僧都公性

いさゝらはかへしてねなんさよ衣せめてはゆめの契もそある

法印宗遍

さよ衣たちわかれにし暁の袂さへぬれやかはらぬる

寄袖恋　　権少僧都信聡

せめてわか袖を衣の関とてもしらすもむなしさをそしらる

前大僧正聖兼

いまはまたしのふる袖も朽はてゝ涙はかくもあらはれにけり

しのひねの涙はかくもあらはれて衣をかへすよるの夢かな

まちかねてまたはかへさぬ人すらもそへ待つゝ夜をあかさん

権律師定叡

こそなきおもひ衣のさよ衣かへしても夢のあはましかは

寄枕恋　　義淳法師

枕より雲井にかはる月もいてぬ涙もさらにねぬちかひや

寄文字恋　　實禅阿闍梨

恋といふもしはかくれぬけの涙ならねは猶そかへしけん

人のうへにむすふるふみをはるかにも見しよりそめしおもひなるらん

かへしあはん

宝池院戦王丸

なしみつやるもむなしき玉章はひたすらみるとさそむなしきかな

續門葉和歌集巻第八

雜歌上

法師信西成賢朋友

のてをこいくれぬ夢ぢのあはれをもとうまとめ

前大僧正憲深

人とはぬ宿のうへにかかりもいくよ過ぬまきはれ行

報恩院すみ侍の夢に山家の雲はやしをゆきさすり治ゝ重經卿おくるゆゑ

法印憲清

時しらぬ花咲ふかさけをもわのはらぬまきはに山さを

五ノ重經

いさゝらは家のあるさけの岩ふかゝ花咲ふかさけをもむ

無量壽院の坊ゆ紅さしくすみそよみ侍りし

前大僧正

きみとあまつ山のすみよりたてなとわの身をたちくらし

祐子内親王

我ゝの世をうしとはすまと我ゝの世をうしとはすまと

故ゝ梅といふる方ゝ侍を

理性院千福丸

有ゝ侍ゝ山のさゝ侍あるとや蓮ゝ庭よ白ゝ梅ゝ侍

同居の前大僧正にゝ侍る

淋しさ絶わたる道よりそひて白雲たんとうゑ人ゝ多きやとの梅のえ

宝池院法橋丸

歌ゝ撰

前大僧正覚源

あるよりとも見みはあらぬ場所さにて月をもみるゝ法の恵の光

弘安九年法橋官位道性とゝ尼にて橘倉をこな

くる僧もゝ仙院法幸のて青海波の法華

寿王といふやうゝを知さる僧もしらぬ法の幸

を代ゝ法門のあとをのしかるゝかゝれたるハ

いとよきるのとゝかゝへの花の中をゝ

僧の名歌

法印勝尊

その恵に光をみるをまちえてゝ

乾元二年に内裏よりむめさくをめされ

ぬ人ゝ

法印之紹

春ゆへそ思ふ人ゝ法代ゝ法を尋ゝ法のるる

比叡山より僧もまゐる聞ようにのて桜花の

よみ者中に

法印道恵

思ひ分つや春さつそまゝ

おのゝふ事僧の名

者

法印実儀

初うなゐたちにのむらを通ふ者を人をへてよそにも心を思ひそめ
上醍醐ゆすみ侍の者ゆゑ心ばせ有りけるよしみもあるふ
中に　法眼敬恵

春ばるの八月にすま里ゆる山里に心よせて月をみる
野〳〵次　河間梨房海

山さと春花みそめそに人はとふ春八いはよ月をうくさ神
權少僧都仙覺

春八月をすそ〳〵もむ山里も花よりほかくうまてはく
る野の千日さかりしら雪のちはなるもの
なるはた大塔のあをおろひ出てすみ侍の者ゆゑ

当ゑ房にてみて侍のゆゑ　前大僧正覺海

ワの山とおもとそ高さ〳〵みとをもるにあるして空の雲の心をや
上醍醐ゆゑ　法眼敬恵

樒はむ山のゆゑ〳〵はみちゑ人て春八樒の花やそろ初ん
山のさ〳〵をうはそ侍ゆゑ　前権僧正教範

うゑをとさてなるんのちはゆゑとよそもはるみのゑ山樒ゆる
花のはと紫侍の者ゆゑ人ゑ〳〵て心敬事也
中はゆゑ〳〵ゆる　法印覺基

座のおもてにふまくおもさをにそとくねはるもはひろめれ
思ふ事侍りける百首歌の中に老後述懐を
いるこころを　　權律師圓俊

いあくはもさくやとおもひしは老来ハ後の世もまことに
酩酊のゆえんあるさまを人々すすめて侍りし花前懺悔とつかを
侍りに花前懺悔とつかを

前性法師

あるこころをよめる　　前性法師
三条坊つ入道内大臣ゆえ侍りしかはをひとり
義時はけるまりて二首の歌をすすめ侍りよ

花下思友人とつかる歌を　　前權僧正通海
咲ぬるおもひやいはるる今一人のちにまた云の未だ
あはぬ人のうの行の侍りて後前中納云為兼卿
ゆえ宮合し侍りける中に四句を
蓮花院右大臣

ゆるさと八月よりそのまつ八月ちなまに八月ちなまにとめ云為重
前大納云經任卿をくまに侍りける法人々義傷の
宮より侍りける中に云為兼卿より
法作定任

ひさしく社のまへにやとりのおもかたち
歌一首　法師親鸞
なにとしらねどすめる山の奥に行まくまけるはるの
迷惑をなぐさめかねて
法師静運
親人のまくらみてのあやめ草時をしらでも称する
五月の法華講法師静運
法師蓮花院主用秋又九
さくたる社のかくあやめ草ふかくもふるん
三井寺の海院隆尭法師寄海の
とぶらひて故池菖蒲とかきたるけるを題にして
命をすくふ行りけれ
前権僧正通海
五月五日為通朝臣寄人色草
五月五日為実朝臣
すみそめの社はいかにあやめ草名をかたれて
為実朝臣
とこしへにたのもしかりけるあやめ草長とそ
法師公紹

述懐の歌の中に　前大僧正慈鎮

いつにかんよとにかゝる紙あつめてもよに知られなき我身なるかな

法印公紹

あはれなりおとしもなくあまたとし庭も古りつゝ花見るかな

五月の比山里にすみ侍りけるころによめる

執行法眼賢延

五月雨にいくかのそらをなかめても人もとひこぬ谷のかけみち

永仁二年五月の比思ふことはへりてあつまへくたり侍るに

侍るまゝに旅ゆくさきなりとて五月雨ぞふる

旅の空までは八

法印定任

うきことのたえまもやすくなきさひこすゝめさへいつまてか雨の

法印静運

たえまやむねねむりもかけさの日数さへいつはるなれや五月雨は

おもふことあさ吹風の雲はれてまたもあるよの月をまつ哉

一流の事を思ひてよみ侍りける

権少僧都道順

友なくはしるしもきよにおとらんとも成ゆくたのむ小野の古た

五十首歌に

法印静運

かゝるらんとこそ八千よ秋や来ぬ我なれて秋の夜の月

歌よむともかはりのなくしなはるゝ侍るも二

すみて西へゆく月の雲の中に

阿闍梨文昭　浄照上人

山寺にありて半そむきにし世の中の秋もうきかな

題しらず　権少僧都経覚

なにとの心よかるあきのゆふべは袖よりも露のをくらん

定成朝臣家にて雲よみ侍けるに夕述懐といふ事を

寛覚法師

月をまつみちのさかひはしらねどもたゞおもひやる夕へなりけり

永仁元年長尾家の哥合に秋述懐の心を

遍智院瀧一丸

うきことのさてしもまさる世の中に身にはよそなる秋風ぞ吹

弟子に侍ける東山の庵にすみ侍けるに月あかかりける夜よめる

法印道恵

てらすらしくもあまの道と月もみてうき世我身のはれぬかな

上醍醐の瑠璃院にすみ侍ける比月をみて

法印覚雅

さりともとなほたのみしまつのこずゑにあはれにかゝる秋の夜の月

述懐の哥の中に

権少僧都俊覚

なかなかによかりつるね袖のなみださへあくまでぬれし月の名こそよ

河原院にすみ侍ける比遍智院よりとくまるも

前新人この中へよみて侍の八されあり

権僧正成賢

もろともに今一秋よもすがらよるまで月をながめて語りあかす

山家の僧をはるのあるわくらはをとゝ侍のあり

阿闍梨房海

月のつるまの松の板戸をあけて本の紫をつくる山おろし風

すくらたまくすをとゝ侍のあるに法月ことのさまをかたる

前大僧都公性

あまをとゝ侍のあり

権大僧都公性

人とゝもやとゝてあるをすむ月の新さくをかたらんとて

歌しる

権少僧都勝云

けりさもあまをとゝ八座の後前の後前の新月

権少僧都定誉

むすび捨し松の色はかの八月にあり月も時雨もとるよりとゝ

高聖人ゝとゝて侍のあるを語りて月をあはれとゝて

権律師恵海

よの中の世のまとゝて後やうにとのをくさめをとゝて月をみるとゝさ

弘安のころ雙林寺の獅子のいとゝにおもの語り

ゝすゝゝ侍ゝとゝて侍りとゝて後たてまつる

前権僧正教範

ゝ侍すゝゝ侍あるみちをかゝりもおもひをとゝて神八ゆ色

出家人

無品法親王　静仁

たちそめし山路も春ぞ白雪のあとはわけ行く袖ぞまさりける

秋の比山里にて人々歌詠侍りけるに右兵衛督為相卿

月おもしろしのゝめたつ山ぢかけるゝ次の朝ぬれぬ

のゝ花ぬれぬ雲ぢ山ぢともなりて秋の雨や袖にも

はらんとよみ侍りける人々に

法印憲深

春の夜むすぶ雲ぢ山ぢ袖ぬれぬ雨にやとへる花の

影ゝ次

権律師慈観

ゝ法なりとなるもすゑのゝ法ゝ仏やそ月にこそ

得業後鑑

ゝ発てゆくすむやゝ春ぞ雲ぢ人やみるん

暁月ゝ侍りけるに法ゝ法ゝ

ゝ人ゝ次

すゝなる山ゝやすらに山をゝ分ゝ

ゝ

会寂上人

もろともにうゝをゝ雲ぢ山ぢ

秋のゝ人ゝ

月ゝ侍りけるに

月ゝ侍りける

ゝ月の

報恩院水壽丸

うきにをしへをしるべとなるこころをしるべとしるべきこのかたこそ

述懷の哥の中に　權律師賴驗

ぬきてしぬる涙もはしをのうへにおちぬるかなよ月よわれもまたなき

こしぬるこころにてあるつるにすこ侍のあるに人こそ

よみ侍るよ月前涙といふこころをよめる　權律師圓俊

はしやうぬ袖のなみだにやうつるまて月もうつるかとあやまる

影しるし　得業後駿

ともなきまやへあるへてをる月のかけのみあるく秋の山里

同性法師

あつ秋てもおなじ月をなかめてはなをしのぶ人のこころ

月ぬすみておもひいはるる事おもひあるまてはなる

侍のあれ　法印道惠

なるこしてまこと思ふこころをやうしとみよ此秋のよ月

影しるし　前大僧正覺海

老らくハ月なるよとうつるかのうつりかはるやあるこころ

よ秋のつきて後上醍醐ゆすみ侍りあるに秋月

述懷といふ事をよめる　圓靜上人宰相入道修範

月新はむかしの今にもかくれをうきよはかりのうらみ哉

前署梨親叢

題しらず

わたつみの岩をうつなみとともに新みよはかる星の月

法印覚雅あつまりて年をかさねあるあとを

彼房をみてよみ侍る　法印静運

やとりもとおもひしかはあまたびそのとなりかるよあるかたの

大乗院隆博薬湯のさかよりはの紫をたひ侍り

あるあてはかたへ侍りあるあ

考のとふまつりしもあるはたるのすさまたる秋の山

法印宗紹

あつまへ人々のうたのしたのおもてまて侍り

けしはあてはかた

法印宗教

おもひやる袖はあらしはの山やくんたのはるの下雲

さよはかり山をとはのあるに秋よりて霧晴月

あつまへ人のあまたはよみ侍りあ

権少僧都道順

名をのはてあるとはをとはるをすきて月をとはるさよの中山

前延法師

題しらず

ふもとをすそ霧の雲はるとて山路の月を独よるか

霧中月をよみ侍る

宝池院松殿又九

たびよりて侍りあるに月入て路くらしの事

釋迦院法鶴丸

星は新八月のあとよりあらたみえて秋夜をのこれる

赤へくもりあるたびて　法印親瑜

物の星はくもりなくなるみやこより減ぬる独の月かな

月送客と云事を　宮内卿道性

ひくるこの独すむ月はくもりなく秋の山路よ

あの月の出るよりおくもひとりぬいあ山の禁よと

を考えて侍りあるを仮よつめて律師頼験ら

法印憲清

とへ中侍りて侍りあ　法印憲清

おもへくこい恋の松風波の言なくぬる秋のさめを

西

権律師頼験

たくひあり秋の神さめぬすみの言ハ仮よりも独ある

事ありて言ハ秋ハ恋ハ

河内梨道範

とてよみ侍りあ

あの通りきこえすハ浦ふるとて秋ハ月ハ

あつぶ人ふるあるうの行法を海のをもてよ法の

のいくるをとこ　法印隆勝

見すてさせハよわるる月ハうらにあけぬといはるるあしたの雨

月前蟋蟀といふ題を　法印相駿

船こむる浦のまくらに淋しさハよさゝ入江のあさのよの月

あきのくれ新をかさねてこゝ海ともも月にさゝめぬ秋の雨人

権少僧都運雅

年法上醍醐よすみて思ふ事一侍の第に出屋敷の

前合こそ人のすゝ矢侍のあるにハよそる

権少僧都定誉

山里ハすゝまひも秋の初時あらさよに水にふるひも部

上醍醐盛琳院よすゝ侍のあるにハよそる

法印隆勝

ひくしこゝろよ好さあ公のうにあるを世ゝ秋ハ里

西忠二年十月最勝講の時清河ハ行ふ重ゝ人し

とてお紫をめされ書にまつ〳〵せて後詠したしま

ゝ侍の者

法印理尊

者人金色ハ知〳〵山の下紅葉雲ハ人ハ食や世ゝ人

永仁の法ハ行のをゝ侍ゝ山の中とて紅葉ハ

月にありて臺節の侍りに或ゝ侍ゝ人紅葉を

わて侍ゝすとて侍者人侍者

讀人不知

隆西はそうしけるとしの秋をうらさびしくあはれにあひて侍りける歌葉八多くはべれどもやうゐん

秋のころ雨載のやうにうちそそぐものをはく

見てかけたるやうなる

檜少将邦経卿

みるうちに雨ふるあぶたはひとうはのをとのまにまにるるかな

九月廿五日法花経雅之入道侍りのちとをとを

色々洛外しみ侍りける中に

蓮華院右大臣

あの月はいつのあとやうつるらむ我をこやとかたらひてとて

九月の比ひしり侍りのあまに人々はかくとも申さ

うくてたつのもんあるにはるのあるもなくなりの侍りも

あまをとバ交集に墳樹正秋風といふこころを題

侍て

合寂上人

うき交をくひうはあるはかりはあらはこはとなく秋風

如加門院うくまを侍りはいとはるの侍りに

九月十三夜よ西信和尚のもとより月おもしろ

きようとたのまるへしとて

花檜佐四　穀範

うちひさしてるみさの山ハなる人のをつのなる人の月をみるん

九月十九日先師権僧正慶賢よりをくられて其月の
晦日に権僧正憲深のもとへをくられそへ侍る
事
法印浄玄
さらぬ別秋の名残とハ聞くもすさまぬ日うすハ程を聞くさ
えし
権僧正憲深
さ夜ふけて秋の名残を聞くさへ思ひ出に日のとをさを聞
あかつきと侍る法九月尽よりみ侍る事
法印静運
秋はすぶ秋のすゑ迄の中のしにはまとそ聞くしよりを
神無月の法印のもとへ申されたいこの歌
道證法師
ちとせ経ぬ名をあらそふ山の
聖戒上人
よ世中絶あさてくいる山ものこころ
道覚法師
道覚法師
はつかくしあり
蓮華院孫陀王丸
神無月ちるく山のあしたにもあり
嵐似時雨といへること
憲海法師

雲くらき夜半は嵐の音たてゝそのまゝおろす松の一むら

題しらす　前権僧正教範

かくしつゝへて帰りぬる身とはしるらめものをなすふ少人神の又時雨らん

前藤大納言為世勅撰うけ給りて後雪の歌よ

よはれ侍りける　法印公紹

しるしらぬ跡まして君がふる雪の庭よ跡をもつけよ名残の白雪

返し　為世

しるしまてまことうれしの見えしあらは雪にも君かそのあとはなすかるん

題しらす　権少僧都頼聡

庭の面もはらはぬまゝにあとたえて君やあはれとゆきけんの雪のあけける

雪朝とひ侍りける人のおほけなく侍りて遣しける　権律師定叡

かくしつゝそとくよ庭の雪の中は其跡もなしとよそにまつらん

高野へのほりて侍りけるに雪ふかく埋れ侍りけれはよみ侍りける　前大僧正實賢

埋れる雪もふかき山里はやくるとこゝろもあさからぬかな

高野の奥の院へまいり侍りて　法印覚基

やすらはゝみちこそはなへ分ゆる雪も跡ありなむ山深くして

雪のあした醍醐なる人のもとへさそひ侍りけるに

さしあつまりてとくを侍りあはせ侍りしに

阿闍梨覚忠

みをくやしかりしふくるの松こ庭の雪とくとくあるもそ法華

雪消の酥酪の同法あまたとりあひて大系代僧仏

七人の僧をたつねて十首のうち侍りあり

中に

会寂上人

とりもにはかの山風ふかぬるをあくまとおもふ人業代白雪

あしたのうの侍りあり十二月の晦る義河の岩よ

とくまりて御侍りあり

開性法師

おくす常の日数をとりおはを我よりうとくなる

述懐の奇妙に業言法花よりとなる

ゆくすえを祈るむるの時のをやうきを人よりとくなん

權少僧都定瓊

国立公文書館
National Archives of Japan

續門葉和歌集卷第九

雜哥

上臈醍醐すくるに内侍の別当より参賢律師權僧正成賢の家をはくるまをさたてまつるをみて僧正

すまゐ帳のとをりにおさまる歌

前權僧正成賢

すゑ人の世をんとはすくるにはちるもあるまにさきそめ

年をへてうき世をあさけ月新やけ山鶯よすみてもん

先師僧正成賢よをつまして後彼あと報恩院に

こもりのるをとりあつめて月をかさねて法とをつまる人の

とをとうをとはまに僧のあるをあつめて人僧あり

前權僧正憲深

おもはぬ方の人めをつゝむなるもとゝすゝふるまにあるを

遍智院の十樂の法をあつめ中に坊中寂静樂といつる

ゝ法を

うけのゝ松の風はあるまにとくしくなるの風をなる

權僧正成賢をゝるはは湯よりくるまにあるに人々あり山

家の方よりせらるまにあるに

法印快覺

ゝとまりなる彩の松風まるの雲はかゝるおとけをそれを

すみ月ぬまとうつ西に爰さえて月もしにかゝるゆふ雲

無量寿院あて山家のこゝろをよみ侍りける　法印静尭

ゆふ雲八月日のうけはをそ弟迄八雲はらくしはもしとゝ

山家煙とゝ題る　法印宗任

時のなる煙をみて山里のこゝろはわさ所をそ

禅林寺浄土院あて前中納言為兼賜前の題を

題あて継尚し侍りしに西をよみ侍る　慈円法師

岩八雲梅桜の里八煙あて西禅なる山の麓

歌　法師　　権律師忠尭

月迄のこゝ知とゝ入る山の奥よりもすみて谷川の音

酥酪よすみ侍りしさよゝ知さとる中あて

月日すさまる法敷忠院なる人のもとゝよみて

うくゝ侍る家法師

東八野をゝあゝ月日にてこゝ法のこすむ山法の宿

上酥酪　　阿闍梨俊慶

ぞにうくゝよのうきさ八淋さ紙をの紙てする山ゝけ法宿

閑居嵐といへる歌を

権律師信瓏

あとなる松のあしたはいつの間にかはなうらんん

山路かそよみ侍る　　隆寛法師

世をいとふこころ半ばとなりて

阿闍梨頼風

すみかをば人に知られぬ淋しさにひとりぞ住まる

法師後鳥羽院御歌にて上醍醐のすみ侍りける

後鳥羽法皇

侍りける

淋しさの住へぬ山の月にそなくいく山里のすみうるまより

宝池院鶴松齢

影ぬ次

あはれしと思ふ法師をいとひてもいはくふかるあるをとくさ

憲圓法師

うきことさへいとなぬまてはなにもまつ山さとそあはまされる

法師覚雅

法師覚雅なくなりて後よをすてゝ皮あと禄林寺

の坊にすみ侍りける

権律師宗俊

すみうるこころをとは山里もうきよの外はやとあるを

上醍醐にすみ侍りけるとしのくれにて

すてゝそゝぎたつるなみさ山のおくふかのかりくらすとなふそゝぎ

暮山望といふる心を　権少僧都定誉

やさしかりしの春はあけぬ亀ハみえもすそゝぎたつるなみの色

海上眺望といふる心を　権律師定厳

おこのうみ風たつるなる名なれとこそたつるあしの根ハ

風むすふあしのそう露たさやて活のよくなるあしたつる水

詩題梨園清　法印実勝

ゆさるくいとゝ活家の苔延ぬるもあはれやとゝまり

嶺よりハ活のあるはのかすのに出る城みそ

嶺の雪とそ見なしたる　権律師宣遍

くるゝなる山ちゆさあひうこんえてそのひまあらはるる水

少将経行和尚あつまやへ下りけるにたまたまおくる

活のあるるはの月物さゝく出ハ

我のことあさるゝ川嶺の二そまさまつ出よあるるはの月

権律師慈儀

題のなかにいそくよめる　阿闍梨懐紹

歌よみハみなへしやとのたよりに書きつけこともたえぬ習ひの　なにそ

題松といへる事を　法印相助

きゝわたる山のたかねの松かえの　あらしの音もわかれゆくかな

題暮春といへる心をよめる

法印覚基

ゆきやらぬ習ひの花のちりしかはよるもねふりかたきゆくへの

ことを御国へくたり侍りけるころにかゝる羽衣東やのこと

ことゝすきにしかたのうき世にて同法の中へつかはし侍りける

権律師定遍

歌よみはしらんとてゐるまかせくのまのたなのこゑ

僧正親玄　あはれにすみ侍りける庵にてさとしもる

法印道恵

はるの中山にて

故郷を忘れかねてとし越てさらに中山

題故郷山

蓮花院右大臣

やつれたる人もこそ見るへきこのはなのうへかたに

あはれにもゆきのふる山かけよけふのあさなき八

よみける

権律師賢誉

人かはる心をしのぶ山かけの雲のたえまにかゝる

おもひいてゝそのかみのはなのたちかへり侍りける

蓮華院右王丸

右ちかすにてすのぬあるまとていてゆる者やとゝ後さのるん
大嶺寺二度の流りのをさゝ者をとりとゝる
とてよゝる

阿闍梨宗覚

たゝのまとゝたハまよくひうよひまて旅みとさ畳ゝ糸
れなのとさ者おてよみ仕りまる

阿闍梨憲一

苦ゝ人をさゝゝ者もとゝまひいまものまゝ者ちと思へき
おのとさみもあて志ゝ者をとりてすゝめまるに
ゆゝてれるひゆけけ仕りまる

権律師定数

郎とゝなりをゝまるゝ流ゆ山路ハ日乃ゝまいすゝ仕み
白山ちゝ山ちと流りしてゝまるゝれのやとゝ
とりてたちまるあうゝ障ゝ小法ゝ仕りまる

権律師頼験

ゆるさゝとりのもおのゝ者物養ゝうまとてむすひゝまる
迷惑のゝ者中に

義淳法師

寿時ゝ法まとさ色にとゝ為ゝ松やゝうゝまるゝん
久ゝゝ世のをとすそゝ□のゝ紙とゝ仕みとゝ法
をゝのひ仕のまる

法印俊誉

老の身はまことの人を祈をそなへ世を物さとりて
歌一首　権少僧都定覺
いはんや滅入多年のことをもつきて老のたるべきなりと
安祥寺に住居して年をとりて侍りける時
法印親瑜
老の身にのうきことのあるまゝにいとゝ程とおもふくるしさ
前大僧正定海乃坊にて尚度会合に曉述懷と
いふる事歌　前大僧正聖尊
曉ハ身はあはれにおもふそなへて老のなげきは
人のすゝめ矢はるまゝに老ぬれて述懷歌

法印
御法をる我身はなれ城却をもまたるゝ老をなり
文集の送老詩は可憐鏡中頻今朝老眼日と
いふこゝ法をよそる　観心院入法印
あさ鏡かゝる後乃俤もこのふやゝ老とあるらん
歌一首　前権僧正教範
身乃程のうきをもたゝ法をもたゝ命なり
法印公紹
おに事もたゝとおもふあさゝやうきよ法世なさけあるらん
法印定任

はてもなくとをのゝまつゆくすゑの身はあまをぶね
知れて
法印賢勝

うきこゝろはすゑとをくとおもふかいはるかなるこゝろ
権少僧都範勝

さりともゝとこゝろにしみに遠ゆくて後のよたのむひかりおもな
法印隆緒

はるゝもとこゝはるゝまゝハむかしすきにしうらこそ見しこゝ
権大僧都憲海

うめとゝもるゝ身はとくのそとゝもるゝ形のうをゝうをゝ
阿署梨懐紹

さゝの世はむかしをとゝはゝ海をおもとゝあ身はおろかなる
阿署梨経賢

ゆくすゑをとゝめなゝ形よとおもとゝハ伝うきゝ身はなゝめを
なゝ庵
前大僧正聖尊

うきゝ身よにあるよはゝのゝはゝとして形ゆくすゑのゆゝかん
寿元二年正月十八日前中納言有房後久我太政
大臣の新作ゝ絵伝ゝ絵伝をゝに述懐のこゝろを
よみ侍りける
権少僧都道順

ひすゝのそよゝひいまハをゝまつゝゆをゝきゝとゝしへよ
新ゝ
官僧正道性

あるべきことをもとめすしてしらんの行はるゝみの分よはのこゝろ

寄愛述懷 人々

あるほどをうはゝはまにてみる者のかゝるかたちなる

權律師良仲

うきこゝろのたゝなるまゝに移るにもなりてさめるうゝ秋の夜

寶池院前大僧正福丸

なるこゝろのあるものもはかれあるこゝろをうきものとなのまめ

權律師宣遍

世をこゝろ捨あるこゝろ宮ゝの中はかの迷惑と

いるゝ心を

阿署梨定弁

人をもぬこゝろをもとゝ新ゝのもとゝ

題しらず

阿署梨田澗

いはくるもこゝろまゝぬゝの中はかゝるこゝろ

世捨ゝのまゝて後ゝみ侍りとあるゝ分はの中に

義淳法師

いとひはくすつるなゝひゝあるゝにもあるゝ人のこゝ捨なる

今八月廿日比に山ゝもとまりあるいはくを都とゝゝめあるゝ

新ゝ次

法眼顯慧

世のこゝとゝるゝなる人八みゝれあるゝ世をもとゝるに

ありとゝれゝのゝこゝまゝき世の中にすゝてゝもすゝてぬ分ゝ

阿闍梨寛海

人ゐこに家をはらひいつるいとのおもひもいまあたらかあるとき

法師定任

うすくもきこえてかくまこと世をいとふ心おのすみそめの袖

権律師寂後

いとゝぬれ心のとゐのおくそよはけきたゝぶかをそらむる

聖戒上人よあひて稚知を浄土を祈る

為ゆとゝくるあとゝて出家はあるまゝ仏道

者はまるてよ

道浄法師

ゝ地をの御はれ人てれるくハ我是ゝとゝるはは人

あはゝにすこ待るゝ思ふ事はゝとて山里ハ

すみ待りまるはよゝる　法師尭雅

かくゝるとゝみきゝのはむ高の宿にたゝもの煙のたゝむ

影ゝ人　権少僧都定耀

うき事ハいはをかくゝぬまことにて身はあゝまそいはゝのにる

身はゝさをのゝゝ乃ハ入ぬ人のゝめまそ我いのるまゝ

法師親瑜

世をはすゝ世にすそらまてゝ思ふ身ハうさもはゝさもあるはの案

権律師慈海

志らすやと思ふこゝろにまかせぬやうきをも志らぬ命なるらん

宝池院松寿丸

よしさらは今をも世をもうらみしよ身にうけてすくる憂をさきのまつりとそ

地蔵院幸福丸

いはけなき身をなけかはいつまてか八十もはてんなのかゆくさきこそおもふ

法印定教

今さらにすはしめしへつるうきをとおもふ身を人やしらん

そのころなくにまなふ人のなさけを申すゑもとしとおもひて

きゝ入て後聖戒上人の色々人中にゝてつかはしける

道證法師

の道にてもさらにうき世にかへる人はいかなるへきかそとはなん

返し

聖戒上人

世をかへるみちをかへてそたのむなる仏の道をゆくとするなる月日さと

大僧正と人にあひて道ぬと聞て在る司前宝白文

をたてゝよろつの道ふかきにつきてそえ入し道なり

前大僧正聖兼

さるゝなかるおきさつのなさけもたかきこのいそのうすともとるをまたしたん

中将俊通朝臣三位に叙爵して侍るつきに

あしたよ彼色とよむ世の道にても忘へしそうともいそり

させそうえてぬなすの道なのをのとやそくまて侍る

右近衛中将藤原朝臣

権少僧都道順

勅撰のさくしゃ僧の名はこれ藤大納言為氏卿

百首はかりなんとそ人侍りける

和哥はかりなんとめぬ法師はなし我身なり

従五位下

権僧正義範

和哥はかりなんとしたしむにより人はあるとも社

永仁のころ勅撰のさくしゃ侍りけるに大僧正隆博

をくしはのある歌はかりなんとそ人侍りける

和哥はかりなんとしたしむるたつのそはの敬白かすのみぬ名をのこさんや

慎奮のこゝろをこそ

従五位下僧正親玄

こゝろをこそ法師は発のなりにてもしらぬ人はなく侍る

権大僧都公性

いはとてもうきはかくれぬ和哥なりけりをさのこゝろ

上醍醐盛琳院よりすゝめ侍りける法師覚雅は

西を異隆と侍りける者も思ひ出まゐらせ

法師隆勝

和哥はかりなんとあはいみなくとをうのてもまくなくさ

法師ハ世を遁よく〳〵世を遁て後こゝはかりにすミ侍り
花かう寺を庵て後彼あと報恩院まての分合し
侍りし花山に懐旧のこゝろをよみ侍る

閑性法師

おもひ入たく身はうきたる世にかきりなき人のあはれはしらすと思ふ哉

阿弥陀院はくせたてゝすみ侍りける花かう寺すみ侍りしも
院中へなりにしのちまてもわすれかたくおもひしておもふへきよし
なと宿はなとをそへてよみてはへりし花

前権僧正 成賢

ちきりおくたての葉なれと秋はすみさへなき後もあはれ残るよ

なかしき事とも申おりの中に

権少僧都寛隆

立まよひもさかりなる世のすゑの花ちるこの葉にかゝるうき

阿闍梨賢寛

まつはよの秋をそてちきるよるの月なかの池のすみそまさり

百首の哥の中に

前大僧正 聖恵

いはくまやとさしあましよの中にうき身ハすまぬ哉ひとりなき
なかきよのよなかのけふこそさの身をそへなきことなかれ哉
はるの哥にも人のいはまくとおもふ哉わか身をすてぬ世なりけり
たゝ人もなかきよくのもそなき身すにつの身なのをハとのあれなし

いけるものとけしかさてもあるのぬしあるこれらを人なる

歌一首　　權少僧都勝玄

あるこしてもとくるこさ身とれたもくもいかさ人すれ名をやさ旅

命をあまてこかさはつる人のもとくはうそんとをあ

又僧正尊　　宝池院賜主丸

くるのあくてさえをんはなはすあるのうるかさもあて道や乃

前栽をあるこわれはるをとそとそ

阿闍梨寛深

あるこわれはひまるまれは命にて老のいのちはるかさを道

無常の命とて　　前權僧正通海

むすひてをくこ命も京をはるこ野のもきうあるこ紙くこ

歌一首　　地蔵院尊松丸

あるさてをなるむをとるまをとはるこ野の命にやとるひのいるつま

なのをとのはるうき世をあるこ人をはあて道紙いはるて乃

權少僧都忠覺

ひはこふこの俗をあるころ

念寂上人

あるこあるこまるこさえてぬ命はあ紙いはるよもさのそるこ

權律師定叡

さるもたのむをあるをなまるまにも人のとまる世をるへ

毒龍為救護衆生降伏十魔すくはれたまふ事

為大信心聖意

ゆめとしおもへるすゑ世なれども法華の文字をえぬるこそかなしけれ

たゞ地獄よりかくるべきよりほかなし我身をたすけんやこゝろにかけ

文昭法師署梨世をのがれて後あつまりくるものを

をみちびきをくるべき程なくくるなくありぬと

なげく

道證法師

おもひそめよわるべき縁のそこまでもなほとなすべきのわかれとは

程をへて此世をはなれ者へても程なくまいるべきよし

思ひまゐらせそめ聖戒上人

達磨のもとをたづねまいらせしかの法師の弟子なりけり

定成法師病よりのち病みて此人を伴のあるはしけ

前中納言為兼は世をいとはんとおもひ給ひ

さ人もはしまし給へりしかのこゝろをとゝ

今の世にて中納言の心をおもひ給ひてこゝをさけ給ひし

ふさひはいつもはすむ世と伴のある成みて法師隨伴の

宮をひよをさして七首のおもひよせて彼の世の人をとり

伴のあるべきに

法下憲清

みちびくこゝろもさることなるこゝろ成おもひ給へ今はかぎりとは

返事

国立公文書館
National Archives of Japan

みちをまもりふるまひのも今をかぎりとはうらんの中をかなしき
寂静院の日えこ弁ちるうつるとて後程なく身まううと
弟ときこえて同院の孫元年法師と聚弟の事を
をうをぶくなる紀州うる変の中小彼日光ヤ待りる事
をすらまぬ婦そう於ぎ呉行はきよ於中はなすき身を
観心院孫法身まうるとて又うちはぎ同院の福寿
なく御侍るとにその長はこ月をの日よみて彼境
はうくしく事
をくのおはするこのつまをまたかさをもてはなるみ
彼の二人の者身まうるとて後孫法百日の仏事し

権律師頼瑜

弟に弟子兼を風俗はるとて法つくしとて
なまくしけまぶのけぬるのうくに祢よぬくて心みはる義をそるふさ
母身まうるとて後年をとて彼墓所へまうてたのまを八
松の風若の声をもはさしくて若さしこそはるよて
をはるひ知らまてかなくく侍まを八

法作實勝

杉をしし若竹にもさるの音をおとひやいはる峯の松風
前大僧正覚演まをくまておくさる侍まる法命に

権律師頼瑜

ゐさ人をうる滅のやうそ永徒なるくみ風よりゆふかる
なす為く事侍りとゆる法又信正親云母ことまみて
歌り事にて法つくし侍りとゆる

法印静運

永徒う迷人人のかけきもうすくよさもちるめくみうる爰うれ
をのみなゆる人ゆをうく迷侍りゆるうる静運法印
りうるなのみなくゆゆ迷ハよみ侍ゆる

蓮花院土用夜又九

うきたもの滅そううハかくりしるみなさとたりてあるとおるとゆ
五月七日静運法印ゆうりて後おるうち経尼信

群ひとまあて之ものゆるに四十八首ハ分をとみて後の
ゆる中に

法印憲清

秋をまるぬおち紫ハ風よ之くうひてのるゆ校ゆ也ゆ
経尼信加之の集よ入屋ゆ永徒ゆ法印ゆ
ゆ書ゆて侍ゆ紙ゆ侍ゆ一ゆ
信ゆ之いゆる撰ゆて侍ゆ俄ゆうゆ侍
後ろ法印ゆゆをゆ

法印隆勝

於くす書のゆめをゆつゆ之ゆ紫をいゆ多紀枝ゆみる
權信正勝ゆ侍ゆ迷て後程へて人のゆとゆうゆ

夢窓疎石国師伝の事

法師覚基

世ちかくこの聖さへかの三八うきよ法師覚基の名
覚基法師さいはひもてゆまうるものは八ちかくて
なりさて遠者の風諷誦よりさいはひ伝ものは

前大僧正覚源

世ものそなかにあくしんやちかものよりくとしにまうふへさを
先師大僧正覚源はをくまてこの野山へはいりあるに
彼の日系記の坊を伝ものは八杖のあしらの
すくてすみをむ苔もをあくまに悪くまに伝の者八

法眼覚親

みとをすみ苔はなし雅まつ風のこゑ成をつん
覚上人はをくまてなけきる伝ものはをる

仙法師

ものまてはものまてをまくまあるはもをのよはあるこもて
頼瑜法師はまうるまて後の伝をものをもを
ものこさをまてよみ伝のもの

良覚法師

をくこゑ神をぬまあるなにのからをく法のあくこの伝
同法はまうるまて後法りよいて伝のあるこもあく

所よりの書を中うるを聞ハ

念寂上人

さるべきにかくるゝねをあとを後夜又みちとの書をうけ
むりし同者し侍の者ゝ深所冥界世をのゝ道
のち尾張国ゝ所ゝすとゝ所ゝすみ者ゝ信仰の時
ををさけるゝをあとより道を侍りし後年をへ
彼いかるを後をゝ侍るにすこゝ者ゝ居ゝ者ハ
さく庵ハあさちのゝ所ゝ者ハ所ゝ者ハ所ゝ者の
まかさつ宿て侍の侍るゝ者

法師寛淳

ゝ所ゝ所ゝ者ハ所ゝ者ハ所ゝ者ゝ所ゝ者ゝ所ゝ者ゝ
高野の奥院のゝ所ゝ者ゝ所ゝ者ゝ所ゝ者の居
とゝ所ゝ面ゝ先師大僧正権僧正慶海の所にてそ
者ゝあゝ者ゝ侍ゝ者ゝ者ゝ侍ゝ者ゝ侍ゝ者ゝ

法眼覚親

おゝ者ゝ所ゝ者ゝ者ゝ者

なく形の仏を安置するよりあみだ佛の五尊を安置
明らかにてよみ侍りとあり河竹中に

前権僧正慈深

あさなさなかの月をおもふ秋の夜の月にあくがれ
おもひ出の
ひろき世にあるかとぞ思ふ秋の夜の月

河竹頼賢　意教上人

山

富士の根の雪の八重ぶすまとも見すさびける山とたなびき

法印定任

河

くもりなく代はあらぬかつらの井の水の小川にあらまほしき

法印玄紹

海路

義清法師

たくしまといらこの崎あり浪よせかけてゆくる海人

権少僧都道順

海道

秋山の松ふきのかるしわ風千里まで清の吉野

河署梨憲家

ゆふかさやなるる竹入江の潮風はあらぬ浪よるあり

法印玄紹

橋

さくらなるなるる竹しハ春のこゝろ年へてもおぼえ人をさそふ

法印長順

若

山姫のきいそいなふのたまあしハ姫りゆくまに若竹むすん

ぬみ見る程もたゝぬまてあり

阿署梨圓濟

鶴

遍照院愛二麿

難波江やしほの引るにそなれてゆふさすこゑあり

獸

權大僧都弘性

さくらはなちるもあるまゝにたゝぬまてあり

筆

三宝院千手丸

たゝよそなれあとは松風のわたりにあるくよとはうこと

海人

阿署梨後數

あまくもはかぬへの浪ようきつゝ世わたるなりけり

正安三年はる今上位よはうせはふてのはなをこ

てまろるとそ人伝のけ

法作之紀

家代もうこもそまろへ梅の花はなはこ

玄家の出いのるはけるこめに大神宮よまろうて家筆

出告文をよみ奉てよろこうとて伊勢はこ出ハとこよはをこ

はたこさなすみよすの出なり人のいのちをなすうるこ

と出詔宣あるもあるまこ思出て

前權僧正通海

やそちまていのる心は伊勢はこ海やとこよの法宝教まうとて

大僧正実濟室池院はうこたてこ門流あるて命

よの世はの事中に　法印玄慶

ゆく末なる今のはの松のゆすぶるなれ　河間梨本禅

春の松巻をぬつるはうしろ人て手と勢はの名ハ君そ見ん人こそ　河署梨重祐

老ぬるハ彩猫の松ゆはるしらひを君の千代やちよに　河間梨範秀

松の枝の千代と君にゆるもの君ハ千代まかさ花ん　權大僧都隆雅

ゆさう人てまゝゆさ形の松めこ松たゝやゆ世のちの春ん

文永の比伊勢の神主法樂の松のさめに祝ゆ

はゝ入ぬに神代よりあの道はさをねはゝゆ

す濃おかまの今すゝん事城おもひはゝけて　前權僧正通源

君の代の松さしかゝるそうひゝゆとよ高河の春はみる人

本云　鼓悲院法勝僧正隆暁詠歌

百五十首校了

續門葉和歌集卷第十

釋教歌

人乃あをすてよはいのさの苔てのにしみてはろかさ
きさめる河　根本僧正聖一

みなにもあさはまたしらのことなきはこれとおもふ　法印後鑒

けうしゝハ三論の心なゝハ絶待学不得の義ゝ言の
義なゝ〻ゝ遠離因果都絶能所の心なるへ一
菩提心論の中に文迷途之法従妄想生といる
ゝ法をよみ侍るゝ　法印定雅

ちりのをもてをもてをしひのをもてをもとめうしつゝ
ありとおもひおもとおもひしかをもとめうしつゝ
大師釋の中に顧過去冥〻不知其首陰未来
漠〻不尋其尾といる事を　阿署梨経信

いつとくしかいつをてくのとさゝめてらなのきやみちよまもひ
猶如車輪無始終といる文の心をよみ侍る　法印頼瑜

小車はゆさめくるにてもとゝまるくしめもなてもなさよ
人のすゝ終なる十首撰分合はかに釋教の心

をよそる　　法下寛惠

たゝしもむをしたさりれみ　　なのしやと

学教成迷と　　法下兼朝

四道とちる　　ひいそゝとふるみちとあ

已名生死之長夜豈無覺悟之曉哉

事成よみ　　法下頼瑜

ちの　　唯識論演説のあ　　六

いあるを　　法下得業　　権律師圓俊

よりの義　　恒處義中

三界唯一心乃四句の文　　法下始覺

約信位　　中

於乃ち　　圓覺經乃始知衆生本来成佛　　法下道惠

いとなるなにはの色　　権少僧都道順

一道無為心

文化のうゝ　　法花經乃序品より上燈の立名度をもて純

有負實と説　　法下

多よ於むさの柴ハよそにたりとて松よりこの山おろしの風

序品乃諸人今當知合掌一心待とゝる文の心を

第權僧正憲深

をろかもいつかをるとすゆ後さけても身のうらへさ為をとゝ

化城喩品乃法華當第進此是化城耳と云

乱心をとゝ

第大僧正覚海

みちなくよやとゝ心をとゝむあるたゝうとゝ先の第法師

授記品

法師之紹

むすむをゝよゝ於ちきのも姉の第法師のうゝとにゆるゝ神

法の法さ濁もゆゝす衆よ月すむしとゝ於とゝ於ゝ

提婆品

叡仙法師

手とをとゝて拾ゝ衆於菓ゝて出法の心於ゝゝもとゝ於の第

寿量品

第權僧正通海

花の色を於のゝゝ於ゝゝ出ゝゝゝゝゝ自心法さ為ゝ於嵐

法師實勝

濁ゆゝ心於ゝを於の第於月ゝゝとゝて ゝゝゝゝゝ第

第大僧正聖忠

ゝ於山のゝ於ゝる社ゝゝ迹ゝゝ於ゝ為ゝ於ゝとゝたのゝて

報恩院如意殊丸

極無自性心　讀人不知
あらはすべき機あるべからざるものなれば禁をもてみるべし聖の心
華厳経乃三界唯一心と外無別法と云る心を
佛照上人
今人の迷心のあさ波も法法乃みづのあらはれ
祕密荘厳心乃表徳門の心を
よみ人しらず
分すれども四方の枝も根ハ花と咲ぬる
大師釋ゆ蓋霧見光無盡寶と云る心を
權少僧都定覺

あらはすべきこの枝をもてみる月ハ雲なき月乃初めなるべし
祕密荘厳心乃ちゑ論ゆて生死涅槃と云るこの心を
法中頼瑜
よ法界をいとふ世ゆ苦なきハさるべき菩提をうつべきなり
入道大納云実をこの心とよのあさ〳〵なれいるを
たゝんとやをのはつ〳〵雲なき中なる月のえをとり
法中公紹
伝日なれる名ゆ
あきらけき月をもとむるこゝろやまて光ハさすにてあるべ
菩提心論乃自心如満月と云る心を
寂静院孫鶴丸

春色は月ハ外にもあるとそ心内のすむにはうをとも
五相成身は通達心はこころをとそる

禅惠法師

雲霧もあるとはるるとそあるとも月ハ曇なき背新
来言はとて

教遍法師

ちりのなとハむ有さ天も記ろとて月ハ有る所のうちにて
永仁二年寛深法不用裏菩提心論の講読後
まいるとおもにいうなる甚深の法のつもう侍るんなを
中はうそ一おもる法のそにはさそ人侍のおも

聖戒上人

おにとゝはなにとる人の形のむんをもとよくあ雲霧人の月
法不寛深
なの葉もいうをとよくむ雲はなんようなさ月のさとにはハ
大日経疏より抜出自證三菩提出過一切心地とい
つる文の心を宗義とそとよみ侍るとおも

權少僧都道順

さて遍くに乾坤をはさて大なの葉もをとよくあ天をとすめる月法
経の中に唯是明朗更無餘事といつる文より法
さて宗のこゝ所をとよみ侍るとおも

法不寛深

こゝろをなをしたをはりまをしたがひてみよとをしへたまふことをうけたまはる

布字觀成就ことをはりて　憲静上人

阿縛羅賀迦師のゝたまはく根よをきさえて心さとりをひらくべしとなり

灌頂とけてのちに非昇地難得遇此教難やと

とゝる大師乃法ことはおろかにあらせたまてをしへ

給へ　法中隆勝

かにとゝの世ようまつりさとくまことに法よりをこりたまへん

灌頂乃後名ようをる　法中道恵

かゝえまあとにいりてをしへたまふ　法ふ

信法とけてのち隨教の心ををしへ人をみて人を

もとゝ人はゝをしへ　權律師慈勝

人の身をまもるたなもよ結願にまこうあれのうちにおひめる

かゝるもで灌頂うけたまへて後人の心をもとゝまちたは

うゝ信をもあるにてをしへ給ふ　權少僧都信聚

さゝなけよ心のやみをふくるまてはゝくこゝろの花の月

影しゝ次　第大僧正覚海

すゝてるまこゝのよちちの世ゆゝけをこゝ法の心をたのむこゝろそ

釋教の中に　權律師定叡

ゆりもたゝ身のをろかなる心をなををくらん心の月をけすをさまをは

三十八首の哥の中に　宮僧正　道性

高の松原を眺望せるとゝいふ題　さ秋の夜の月

ちきりしをかる野の山のあなたゆけいつくさ月のゆくすゑの哉

十樂の詞の中に本覺感應樂といへる心を

ワのたのむ方ちかしもほ樂やほの遠雲敷方にかさくれをすゝひて

法華修學樂を

日にそへてみゝくさ方ちかのうしはるはるのよもすのうの人の家も

三十首の哥よみ給へる中に

寂仙法師

みるゝみハ世と共をもうぬきよるの月ぬきのゆうきゝの月ぬきをつてくむ

受法のこゝろよりの配酬ゆすみ侍るまゝにたゝまて

同法なの者る人のおなしくゝ中道のこゝ者

哥もあくまてゝ中道のこゝ者

合寂上人

おもひこゝろをあらふ心法のゆうの月をくまんとのとは

未法のこゝろを法侍る　法印後養

くみてしらぬ人ハたゝしな法のこつ者の道法す傳のたゝ法の法

野徑雪とゝ入ゝこゝろ小野の流の奉をとゝ侍り

法印憲淳

いかゝ人のあと紙あつたなぬみの人て雪にうそふをのゝ雪ふち
埃表紙をかゝひよとゝきてよみ侍るとゝ
法師静運
雪はゝ袖もいかゝはつゝきうなゝ迷ぬんかの身をけはみちにつて
上醍醐あて仏法修をとゝきてよみ侍るとゝ
会寂上人
うゝやまいにて人はるゝなゝ迷ハみのゝ世はをなうゝん
了祝上人を導師して佛供養をとゝ迷第次の
物よゆゝさぬゝとゝ迷ハはのハゝとゝ
宮修正道性

あゝはゝのしゝのゝ乃法はゝ座ゝ迷ハ姫のゝゝあゝとゝのゝゝ
了祝上人
はゝゝうゝ法はゝをいゝくゝまゝひゝあゝとゝうゝ座の者はゝうゝゝ
次の日ゝの部ゝをゝみゝて侍るとゝ
法師道恵
をゝ迷にゝゝうゝうゝみゝ更に姫ゝゝ法ゝ座はゝ白者
法師聖覚法の後よ根のゝ人ゝ
水精の念珠をゝとゝて姫ゝゝうゝ西面はゝ生
ハ主言中品の悉地ゝとゝて人ある事ゝの迷ハ
よみてゝ人侍るとゝ

極楽はくちすはちくはくとをの事をまとおもはしる

前権僧正敬賢

法下聖覺

さてもゆくさき法の事海のゆくとしてうきよはちやうはてしなき

観無量寿経乃勢至観の今離三途不處胞

胎といふるを法をを

みはのみちをあるはちくはくとをしるへしるへし

前大僧正覚源

阿弥陀経乃六方證明乃証誠

法下宗任

たのこあるちうひはちくはくとをもてもみよはちくはくとをとをる

定散乃二仏称讃さくはくとをしるへし

法下賢聖

月はすみ雲にちくさむ仏はも世を妙風の声をつするる

交得生者莫不皆乗阿弥陀佛大願力為

増正縁といふ文の仏を聖戒上人

人をつつぬ誓はは私乃わるんとき法の事はまていさやいたん

権律師宗俊

うまてくさくるき海はたるあの誓はは毋のはちはすをて

加えく年仙洞御講義まいり侍るに大師

他阿弥陀仏の二仏を空海は宗と釋したまふ
仏を人の回向のあるべきにたとへ人倫のあ

権少僧都道順

咲句ふ色香は外にはちりて後ぬまるものすくやはある
授業目録心
吹風のかをりひなく称とちる花のむなしさをおのれとそ
他阿大宗心の中に唯識無境の仏成
美は世にみることはみるむなくしてこゝ後をそまとるの
美心不生仏
うはくもの美くもりのやきていくんはこゝろとくのをえんは

法のみちのにしへなりとふこと衆のうへとものをおもひて
不偷盗戒
法市兄基
ワすれてもたゝくにはるる白浪のうきなもたゝみもたゝのうら
宗家の十住心論の仏を讀て當寺瑜魔堂
ゐをしける中に異生羶羊仏を
よこと人をこゝ

法のくにをなにはのたとのよりもゝ仏とくたをえたてて
不生一向觀中妙斷といふるこゝ後を

権少僧都定蓋
隆寛法師

ひつはくのちよりの心をうしなはんとうるすることあまたよはあり

異生羝羊心乃釋の中に三度戴頂暗同狗眼

といふる心を　　權律師頼驗

さしなみつの考へてとも有ぬそのうへもとゝきの心を

嬰童無畏心を　　よく人をしる

たゝ一切の衆をたのめとくはつゝちく八法界もつてとゝまん

愚童持斎心乃本覚内薫佛光外射といふる

ゝ誘を

日新さんをたの心に無畏になるとも別ゝ八とけそめに者

宮僧正道性

唯□無我心

義は世やゝ却ひなをとゝもかさ迄ぬハなゝ我却ゝ有心なり

いかにしても者ゝぬ世のたとゝ人もゝ一せ切ゝもさゝ

經乃中に生死涅槃性如貪と沒る文よつきて

まゝて人の行へ涉のたゝ有

法印憲淳

さゝんやゝぬ藉祢の義は俳をさのたにかしていうのみ見ゝ

聖戒上人

藉祢ゝさむるう涉ゝは有ハをゝさのふは義乃おとうゝも

慳貪乃心をよゝみ侍りとある　　前大僧正覚濟

はりくにの難波乃浦なにはなれむしたはあはやへぬさ

仮酒の歌　　法印實勝

竹の葉にうゑゝ月の新さして面影さへぬる春の夜

康和二年をしたる阿弥陀の像をゆうひて

まとろゝ給ふに　　前大僧正定海

嘉乃永さえあん接八功池のもちすをうちとかとこそをん

神祇哥

伊勢皇太神宮乃御ことあまくるの給ひあるはへ

はかくちとう浦てさ浦をたてまつるゆかと

とうろはは事をよみ侍りける

前權僧正通海

あ成てゝを日はたうゝみよう浦久ん新宮年よかくうはは

伊勢少将無乃家はは面の内うゝみ小月はやとう

侍りあるをうえてよみる

あさくまやかゝみの家のくもりなく新をあらて月そやとまる

人くあまくゝ神祇の哥よみ侍りあるを中に

百代をつけてそいのゝ神風やいすゝ川の浪のきよゝゆゝ
出家の後八幡宮まゐりて侍りてよみたてまつる
　　権律師圓俊
男山代々あとたれすゝぬ若木神をもあくるとしの
おもふ事侍りけるをもあるはしめ侍りてよみ侍る
　　法印道恵
あ世のちきりをもつるはつる者もあるはつる
賀茂の出ちうひをおもふ事侍りてよみ侍る
　　権律師宣遍
　　蓮花院右大臣

つるかよたのまん人をいはしまなさしとちかふ神かな
　　神
稲荷の社まゐりてまはりの第十又首の句
中に
　　和権侍正義範
たのもしなる法のちとはゝ神のちかひの枝をむすちち
出家のゝめに酬酬へすはいんとて春日の社まゐり
てゝよみてまゐりる　　権律師慈勝
ちかひをそ成たのみ春日山やつる法のをの者はて
同社あて　　権律師定叡
春日山よゝはまつの月新月後の夜八幡のゝ社
住吉の社と三社をよめる　　権少僧都経尭

おもひやるこころはよそすむもとより神さびわたる浦の松風

神祇官社中に白石社を　法印静運

神のちうひかくれぬ色紙のとすむ松をこそ浦の松風一本

熊野權現の古歌に色紙形に書てかけるを

をのぬおもひをこせよ我もわたるもとと義なれば

ちぢのうちはなるもおもひいてよたれ

權少僧都經乘

神もまちうひつるなる我をのむかのうちにへてかなめ

月あるこもあるに長尾宮よりて侍りもあるよ

松風かにちてて神さむをのあまにへよみ侍りける

權律師頼驗

月新神さひよあるもむもるもはちあのたの家のあるはたの松風

法印実猶笠山の清澄寺社よまうてる

所をまはるに屋よりすぐ矢侍りあるは

法印定愚

よみ侍りあり

若はむす岩根よはあふ清澄よ年経る神や新やとん

いるること侍りあるころよみて清澄の社よ

をまはるあるこ

權少僧都定覺

神よ神ろのむ心の姿をいさをいにをこ人をもとをとをこ

ちの後義の清澄寺にてやまひあるを侍りにある

託宣の文はあまたはちらしはなる中に源氏
の物をよみたる色紙ちらしはいとをかしけれ
はなり

權少僧都道順

清水やたつむみくまのもとまたるかすみ
にすむ

円俊法印手跡云々
九十首校了
右拾冊雙紙院有之寫本也 巻者奥書隆源大僧正御手跡
右續門葉和歌集以村井致義本校合了

群書類從卷第百五十四下

国立公文書館
National Archives of Japan